

「黄昏の太宰府」便り（第1回・連載予定）

長濱和代（日本経済大学経営学部教員）

西の空に日没のあと、雲なく夕焼けの赤さが残る時間帯を「黄昏（たそがれ）」と言う（写真1）。福岡県太宰府市は、私がこれまで生活してきた関東圏から、夕日が沈む西の方角に位置する。その太宰府に拠点を置く私立大学の教員になり、ようやく2年が過ぎようとしている。「黄昏」のもう一つの意味は、盛りの時期を過ぎ、衰えの見えだした頃を比喩的に示す。50歳を過ぎた筆者は、人生の折り返しを迎え、人生の黄昏の時期に足を踏み入れつつあることを、この便りを書きながら自覚しているところである。

さて、太宰府で知られるのは、まず太宰府天満宮であろう。「学問の神さま」として知られている菅原道真公の御墓所でもある。道真公は平安時代の学者であり政治家でもあったが、太宰府へ左遷されてこの地で亡くなった。まさに「黄昏」の時期をここで過ごされたと言える。また太宰府は人口7万人余りの地方都市であり、日本の人口減少が加速する中で「黄昏（たそがれ）ていく地域にはなるまい」とする葛藤があるものの、地域創生を必要とする側面もある。

以上をふまえ、「黄昏」の地に赴任し、「黄昏」の時期を迎えつつある筆者が、この地での生活と仕事とともに、それによる右往左往する状況と考えを書き留めることにより、太宰府からの便りとして。第1回目である本便りでは、地方への転職とともに、四苦八苦してようやく終えた博士研究との日々を書き綴った。第2回目以降は、地方都市の状況を伝えるレポートとして書き進め、地域の私立大学が如何に生き残るかについての方策や、地域創生の可能性について等をご報告できればと考える。読者の皆さまにご笑覧いただき、さらに相互に思索を深める機会になれば幸いである。

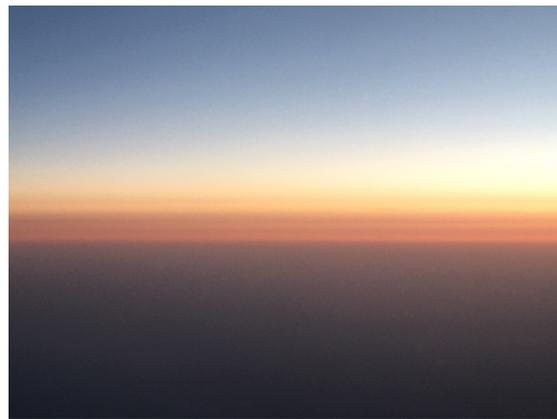


写真1 黄昏（たそがれ）時
（東京上空（機内）から西の空を臨む）

1. どうやって地方で仕事を見つけるか～関東から九州への単身赴任の決意～

福岡に来る（地元では「来福」すると使う）直前までは、連れあいと大学生の次男と暮らし、関東圏の複数の大学で非常勤講師をしていた。主たる仕事はインドヒマラヤを調査地とするフィールドワーク（ナマステ 131～134号に連載）と、研究をまとめるための博士論文の執筆であった。2019年に博士論文に関わる3本目の英語論文を出したが、肝心の博士論文が収束しないことから、博士取得が叶わない状況下にあった。研究者的には若手でも、年齢的には若手を越えつつある状況から、大学専任教員の公募に応募しても、面談まで声をかけられることは稀（まれ）なことであった。

2019年の年末に都内の私立大学の公募では、珍しく面談に呼ばれ、最終面談では5名が残った。2名の採用枠があったにも関わらず、不採用となった。採用の可能性は決して低くないと思っていたので無念な気持ちとともに、若手に負けた悔しい気持ちがあった。大学専任教員採用における年齢の壁を、何とか越えられないだろうか。素晴らしい業績を出して「ぜひうちの大学に来てください」というレベルに、自分はまだ遠い。そのとき院生時代の研究室の先輩（当時、東大 CSIS に所属されていた小林博樹先生）からの助言が脳裏に浮かんだ。彼は、日本で就活中のポスドクの留学生に次のように説いていた。

「年に 5~6 つの大学に応募して不採択は当たり前。毎月 5~6 校、いや毎日でも公募の書類を書き続けて、面談にまで持ち込める大学を一つでも作りましょう。」

優秀な若手の学生と比較したら、年上の筆者は公募では負けるが、条件を絞って応募数を増やせば、自分の能力を活かされる大学に出会えるかもしれない。ここでめげずに踏ん張って、専任教員になったらと！そして博士論文も決着をつけようではないか！と自分を奮い立たせ、年末から公募を厳選して毎日のように書類を書き始めた。

年が明けると、環境・SDGs に関わる教員募集を行っていた公立大学と私立大学から面談の連絡がきた。（夏から秋にかけての公募が終了して、その玉突き人事により、冬から春の公募は、採択率が高いかもしれない。）場所はいずれも福岡県からで、関東圏の大学は全敗だった。（より大学数の少ない福岡からお誘いがあったのは、たまたまご縁があったと考えたが、学生人口が増加しているのかもしれないし、地方の教員公募の競争率は首都圏よりも低いことも想定される。）福岡行きは、千葉から随分遠いと感じられたが、飛行機なら東京から福岡まで 1 時間 30 分で、実家の名古屋までの新幹線での時間とかかるコストに等しいかもしれない。夫は都内に会社に通う会社員だったので、私が単身赴任するのも面白いかもしれない。末っ子の次男が大学の最終学年を迎えるので、憧れの単身赴任生活が可能かもしれない。などあれこれ考えを巡らせた結果、「我が子たちが巣立つことから、福岡に単身赴任をして、学生たちを成長させます！」という意気込みで、2 つの大学の面談に臨むことにした。

太宰府にある大学の面談後、晩のフライトまで時間があつたので、太宰府天満宮を訪問した。ちょうど2月で梅が美しく咲いていて、まるで自分を歓迎してくれているように見えた(写真 2)。この道真公が眠る場所へ、自転車で通うことができたらいいかもしれない(自分の LINE (SNS) の背景は、この時に撮影した梅の花である。) 等と考えた。

面談の結果、ありがたいことにいずれも採用となった。どちらの大学が良いか、思案していた時、都内の小学校での研究会に参加して、諏訪哲朗先生(当時は日本環境教育学会会長)にお会いする機会があった。先生の「任期なしの大学の方が、条件は良いですね。」とのコメントが、神の声のように聞こえた。さらに収入面では、公立学校よりも優遇されていたから、太宰府を拠点とする日本経済大学の教員として契約書を交わして仕事をさせていただくことを決意した。

家族からは、「念願かなって、ようやく専任教員になれて良かったね。」「コロナが拡散して、在宅勤務になるタイミングで転職できたのはラッキーかも。」と反対はなく、名古屋の親兄弟・友人たちからは「名古屋から千葉、今度は福岡と、東へ西へとたいへんだね」と同情を受けた。故郷を離れ、夫と子どもを残して、地方で単身赴任して仕事をするのは、おそらく大変に違いないということだろう。それは見方を変えれば、家族に気兼ねせず、自分の自由な時間と仕事を持てるということである。今まで一人暮らしの経験すらない自分にとって、ようやく得た自由と選択の権利の保障であり、自己実現への道筋でもあると考えた。



写真 2 太宰府天満宮にて

2. フルタイムの仕事と子育てをしながら、どうやって博士論文を終えるのか

2. 1. 小学校教員から大学教員への転職

筆者の場合、2009年から2011年まで、都内（足立区）で小学校の教員をしていた傍ら、毎週、TX（つくばエクスプレス）に乗って、晩に開催されていた筑波大学の増田美砂ゼミ（国際森政学）に参加して、研究のイロハを学んだ。長期休業中になると、1～2週間のフィールドワークへ（旅も兼ねて）海外に出た。2013年3月に筑波大学大学院で修士課程（環境科学）を修了して、同年4月に東京大学大学院の博士課程に進学した。

博士課程在籍中は、どんな執筆の仕事も引き受けた（筆者の名前を検索いただくと、アースウォッチ・ジャパンでの教育実践報告、アミタ（株）での12回分の環境・森林のコラムや、「数理女子」での研究会報告などが、今も検索可能であろう。）。さらに出前授業や非常勤講師（多い年では5つの大学の講師を掛け持ち）をこなし、日本環境教育学会では、国際交流委員として国際交流会を毎年実施した。2018年に満期取得退学した後も、コロナで海外渡航困難になるまでインドへ毎年、調査に出て、論文・報告・コラム・出前講座など、ボランティアの仕事も引き受けて、発信し続けてきた。

子育てに関しては、息子たちが高校・大学と進学して卒業していく中で、要所要所で子どもたちの成長に関わるようにした（夕食を作って用意しておく、子どもの元気がなさそうな時にはこちらから声をかける、学費に関わることは支援する等）。彼らは幼少期の時のように手がかからないので、自分の時間が増えたのありがたいと思った。だからこそ、「君たちをいつも気にかけているよ。」というオーラを漂わせ、声をかけるようにした。

自分の時間を得ても、博士論文としてまとめることができないジレンマの中、収入的には夫の扶養範



写真3 日本経済大学にて（2020年 着任時）

囲内で仕事をセーブして、博士論文に向かい続けた。博士研究の前半は、フィールドワークの楽しさと自分が見聞きしてきたことの発見を書いてきたが、それだけでは博士論文に至らないことを研究後半では痛感した。収集してきたデータを分析しては批判され（構造的な面談調査において、その重回帰分析は間違っている、ビッターリヒ法を用いた樹木調査について、その精度はどうか？など、領域横断的に研究者からの批判をいただくこと）、研究者として鍛えられた。それが繰り返されるほど闇の中に入り、博論は暗中模索の中、身動きが取れない状況にあった（論文審査の後、命を絶つ

人もいと聞くほどに厳しい状況があるが、これは別の機会に書ける時が来るとよい。）。そして闇の中にある博論を、家族と離れでも一人になって集中して書くことで、光明を見出すことができないだろうか、何とか決着をつけなければならないと考えていた。

そんな状況において、先に書いた九州からの公募は「渡りに船」とも思えた。そして2020年4月から大学教員へ転職して（写真3）再びフルタイムの教員となった。

2. 2. 大学での業務、東大課程博士の挫折と筑波大論文博士への道のり

大学では、小学校教員の時には経験したことのない管理職（部長職）での採用だった。（研究・教育に専心するために管理職を希望はしていなかったが、年功序列的には妥当であったと思われる。「部長職に

就いて頂きます。」と言われた時は、私立大学は企業組織であることを実感した。さらに営業活動の一環として「高校訪問に行ってください。」と面談でも念を押された。この点については、次号で書きたい。) 初任ではあったが、図書館・情報センター長を任せられ、図書委員会や情報委員会を率いて各学科長へ報告、教授として教授会(経営戦略会議)への参加、そして教員として1年目は新たに担当する講義を構築する業務があった。さらに4月の着任とともにコロナが拡散したので、大学キャンパスで学生たちに会うことができず、パソコン画面の向こうにいる学生たちとのオンラインによる授業が始まった。

4月半ばを過ぎて、千葉への初帰省の道中、空港で足をすべらせて、右足小指の付け根を骨折した。陸上部出身の自分は毎朝、散歩とランニングを日課としているのに足を骨折するなんて! 見知らぬ土地での忙しい日々がストレスになっていたに違いない。大学の指示により、そのまま千葉の実家で5月末まで休養しつつ、オンライン業務と授業を行った。最初の2ヶ月は、まったく博士論文を進めることができなかった。6月から福岡に戻り、本格的な大学業務の開始とともに博士論文のまとめを始めた。

東大では、博士課程を満期取得退学していたことから、課程博士については2020年12月までに本審査に合格して論文を提出しなければならないという期限があった。指導教員の斎藤馨先生には、毎年海外へ渡航させていただき、ねばり強くご指導を受けて、3本の英語論文を出してきたことに感謝している。同時に、どの領域でまとめて新規性を整理して博士論文としての筋を通すのかについては、自分の力不足により論文審査委員会から合格を得られず、先生には申し訳なく思う。

東大での課程博士としての提出が困難となったことが確定した後、それでも諦めずに博士論文をまとめて完成させる道を探した。筑波大の先生方に相談させていただいたところ、2名の研究者から同じ先生をご推薦いただいた。それは筑波大で林政学研究室を運営している立花敏先生であった。当時、筆者は林野庁で林政審議会の委員をしており、立花先生は同審議会の副会長でもあり、筑波大の林政ゼミでもお世話になったことがあった。そこで立花先生研究室の門をたたき、年末から審査を開始いただけることになった。自分が悩んでいた博士論文は立花先生の導きにより、林政学の知見から展開して収束させるという試みを開始した。

12月から1月にかけては大学での秋学期の授業が終わりつつあり、年度末のまとめに入っていたことは博士論文を極める追い風となった。その風に乗るために、太宰府の大学研究室で夜な夜な論文を書き続けた(研究室に隣接する大学女子寮に住んでいる。移動が至便であり、夜遅くなくても警備の職員が立ちセキュリティが確保されていることは、いつもありがたく思う。) さらに毎週水曜の午後にオンラインによる1時間の特別ゼミを設定いただき、立花先生とランディープ・ラクワル先生と3人で博論の展開について議論した。(私たちの年齢は近く、先生方は同等の仲間のように接していただき、自らの考えを深めたることができた。) それにより林政学分野に新たな地平を見いだす覚悟を決め、論文の修正を進めた。研究設計の概略を示すポンチ絵(図1)を作成したのも効果的だった。

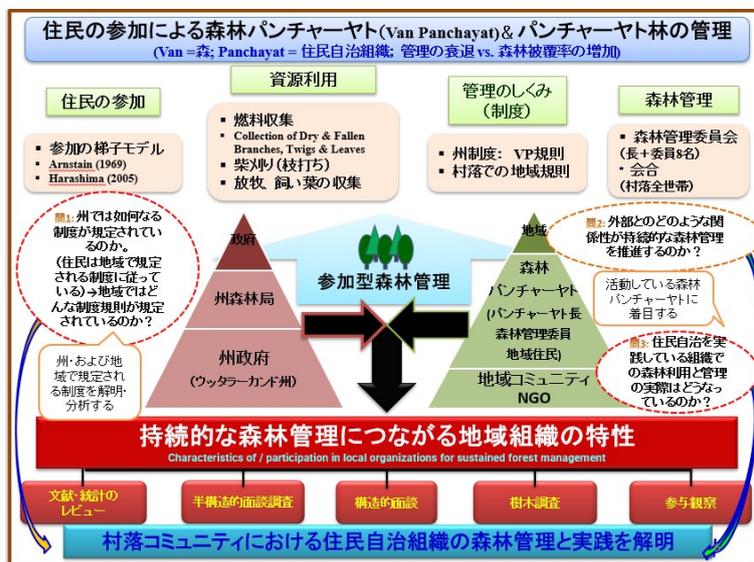


図1 博士研究の概要

最初の審査では、5 本以上の査読有り論文を執筆しているという条件を満たしていることだった。次の中間審査では、副査から重回帰分析について批判が出たことにより通過できなかったことから、数年を要したこの分析を、泣く泣く取りやめることにした。（この分析については、2021 年度から採択された科研費にて再挑戦する。「森林の持続的利用と管理のための設計指針の検討」というテーマで現在、新たに探究中である。）2 度目の中間審査では、森林管理への参加の段階と条件に焦点を定め、小中学校のジュニアでも理解可能な簡単な図表としてデータをまとめて考察した。参加条件についての分析が明瞭となったことが高評価となり（この参加の段階と条件についての結果と考察を、住民参加型森林管理の事例研究として英語論文にまとめ、海外のジャーナルに投稿中）、最終の審査会（本審査）では合格を得た。そして2021年3月31日に博士論文を筑波大学へ提出して、博士（農学）の学位を取得した（写真4）。小学校教員の頃から研究を始めて、修士課程、博士課程、そして大学教員を経て、10年余を費やしたフィールドワークに基づく調査と分析を元に、この太宰府の地で博士研究としてまとめることができたのは感慨深いものがある。

次の目標は、日本語と英語で博士論文を出版して、読者の皆さまへお届けできればと考えている（日本林業調査会と農文協プロダクションに論文を書籍として見積っていたが、現在、日本学術振興会へ出版助成を申請中）。その道はさらに険しそうではあるが、この太宰府にて自分がエンパワーメントされるならば、新たな「黄昏」の意味が付与できるのかもしれない。

（第2話につづく）

追伸

読者のみなさんは、地方で暮らすことについてのどんな内容を知りたいですか。編集部を通じて、ご要望をいただければ幸いです。



写真4 ランディーブ先生
と学位記（2021年）